

看護基礎教育におけるeポートフォリオ学習の実践報告（第四報） —母性看護学におけるルーブリック評価の試み—

鷲尾 弘枝¹⁾, 宮崎 誠²⁾

¹⁾ 畿央大学健康科学部看護医療学科（〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2）

²⁾ 畿央大学教育学習基盤センター（〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2）

E-Portfolio practice report of nursing education (4th Report) - Introduction of rubric evaluation in the field of women's health nursing -

Hiroe WASHIO¹⁾, Makoto MIYAZAKI²⁾

¹⁾Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kio University

(4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara, 635-0832, Japan)

²⁾Center for Teaching, Learning and Technology, Kio University

(4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara, 635-0832, Japan)

要約 畿央大学健康科学部看護医療学科NEPSプロジェクトの2018年度母性看護学における授業ルーブリック評価導入を試みた。研究同意が得られ、回答が得られた母性看護学援助論Ⅰ95名（94.1%）、母性看護学援助論Ⅱ90名（93.8%）の学生を対象とした。2科目共に、すべての教育内容項目について、中間より最終評価の点数が高く、有意差があった。授業ルーブリック評価導入によって、学生は自己評価を主体的に実践するという結果が得られた。また、現在行っている母性看護学2科目の授業の到達目標は達成できたと確認できた。そして、授業ルーブリック評価は、学生への効果的な学習支援のあり方を検討する上で貴重な資料となることが示唆された。

Keywords：母性看護学、eポートフォリオ、ルーブリック、看護基礎教育

I 背景

人生100年時代を迎えて、2025年には、団塊の世代が後期高齢者に達し、5人に1人になると予測されている。一方、生産年齢人口の減少、少子化は歯止めがかからず、2017年の日本の出生数は94万6065人と、統計を始めた1899年以降、過去最少となった¹⁾。いわゆる、一人の女性が一生に生む子どもの数である合計特殊出生率は1.43となり、人口維持の最低基準値である2を大きく下回った。そして、その影響により、妊産婦及び新生児を対象とする母性看護学の臨地実習は、実習施設及び看護の対象者の不足によって、学生の体験そのものが非常に難しい状況となっている。また、母子に身近に触れ合う機会がほとんどない現代においては、妊娠・分娩・産褥や新生児の生理的变化や看護はイメージしにくく、母性看護学領域に対しての苦手意識を持つ学生も多い。

文部科学省の中央教育審議会が2008年4月に取りまとめた「学士課程教育の構築に向けて」（審議のまとめ）²⁾では、「現代の社会は、個人が生涯にわたって学習し、

複数の職業や組織で働き、活動する流動性の高い社会である。個人の能力を評価する方法として、ポートフォリオが重視される時代といえることができる。学士課程における評価に当たっても、多様な学習活動の成果を評価する観点から、学習ポートフォリオの手法を積極的に取り入れていくことは有意義である。」と、学士課程におけるポートフォリオ活用への言及がされている。そして、近年、その中でも、学習や活動の記録としてのポートフォリオ、特に電子的媒体でのeポートフォリオを活用した学習活動の可能性が注目されている。

「母性看護andポートフォリオ」を検索したところ、国内の医学中央雑誌（医中誌web版）及びCiNiiにおいて、前田・石川による論文³⁾1件が該当した。同論文では、ルーブリック^{注1)}の評価基準によって、（学生は）母性看護学実習で何が求められているか、何をすればいいのかを評価基準で確認して能動的に学びの姿勢を持つことができた、と報告している。しかし、この報告は、母性看護学実習における研究であり、講義・演習に関して活用した研究は見当たらなかった。

注1)：ルーブリックとは、米国で開発された学修評価の基準の作成方法であり、「成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語（評価規準）からなる評価基準表」と定義され、記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難な、パフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがある⁴⁾。

母性看護学における授業ルーブリック評価の導入

畿央大学（以下、本学と記す）健康科学部看護医療学科の母性看護学領域では、前述の現状を踏まえ、学生が、実際の対象や看護が理解しやすい教材の工夫や模擬体験を多く取り入れながらも、その方向性を試行錯誤してきていたため、効果的な教育方法、学習環境の方向性の明確化を目指して、授業を見直し、その改善を図ることが急務となっていた。

本学看護医療学科の教員有志と教育工学を専門とする教育学習基盤センター教員（以下、専門家と略す）で看護教育におけるeポートフォリオ導入授業を設計する取り組みを実践しているNEPS（Nursing e-Portfolio for Student）プロジェクトでは、2017年度より、看護医療学科の一部の授業において、授業ルーブリックの活用を開始しており、その詳細を第一報から第三報で報告している^{5) 6) 7)}。

そこで、今回、先行研究の見当たらなかった母性看護学領域の講義・演習2科目について、授業の改善の試行錯誤の脱却を図り、学生自らの探究心の向上、主体的に学ぶ姿勢を支援しつつ、効果的な教育方法、学習環境の方向性を明確化することを目指し、授業ルーブリック導入を試みようと考えた。

ここでは、母性看護学領域の授業ルーブリック評価導入の試みを、本プロジェクトの第四報として報告する。

II 母性看護学の科目構成

本学看護医療学科の母性看護学は、専門分野IIの母子看護学の中に位置付けられており、科目構成は、以下の通りである。

1. 2年次 必修 学生約100名受講
 - 1) 前期 母性看護学対象論 領域教員による教室での座学が中心
 - 2) 後期 母性看護学援助論 I 領域教員による教室での座学が中心
2. 3年次 必修 学生約100名受講
 - 1) 前期 母性看護学援助論 II 領域教員及び非常勤教員による演習が中心
 - 2) 後期 母子看護学実習（母性看護学領域）学生3～6名での施設実習

III 方法

1. デザインと実施時期

今回、対象とした科目は、2018年度前期の看護医療学科3年次配当科目である母性看護学援助論IIと、同年度後期の看護医療学科2年次配当科目である母性看護学援助論Iの2科目である。2つの科目において、授業ルーブリック評価を行うまでの準備から実施までの経過は、以下の通りである。

- 1) 有志教員による学内eポートフォリオ学習会参加
2016年4月～2017年3月
- 2) 母性看護学援助論II: 2018年4月～2018年8月開講
2018年3月: ルーブリック作成
2018年4月: 研究説明・同意
2018年6月: 中間評価
2018年8月: 最終評価
- 3) 母性看護学援助論I: 2018年11月～2019年1月開講
2018年11月: ルーブリック作成
2018年12月: 研究説明・同意
2018年12月: 中間評価
2019年1月: 最終評価

2. 対象者

本プロジェクトへの同意が得られ、授業ルーブリック評価を実施した本学看護医療学科の学生を対象とした。母性看護学援助論Iについては、看護医療学科2回生101名中、中間評価は100名（99.0%）、最終評価は96名（95.0%）が回答した。母性看護学援助論IIについては、看護医療学科3回生96名中、中間評価は95名（99.0%）、最終評価は91名（94.8%）が回答した。また、そのうち、中間評価・最終評価ともに回答した学生は、母性看護学援助論Iでは95名（94.1%）、母性看護学援助論IIでは90名（93.8%）、であり、それらの学生のみを分析対象とした。

3. 倫理的配慮

本プロジェクトの目的、期待される結果と共に、協力は自由意志によるもので、協力しない場合の不利益はないこと、知りえた個人的な情報を正当な理由なく第三者に漏らさないこと、科目履修終了後もこの守秘義務については同様とすること、また、同意しても中絶、辞退は可能であること、データは匿名として厳密に管理すること、ルーブリック評価および蓄積したPDFを一部データとして公開することがあること、結果は研究以外の用途には使用しないことを文書または口頭で説明して、同意書への署名や回答を得た。

4. 母性看護学領域における授業ルーブリックの作成

2016年から始まった看護医療学科内のNEPSプロ

プロジェクトの開設直後1年間のeポートフォリオ学習会で学んだことを土台として、母性看護学の講義・演習科目である母性看護学援助論Ⅰ・Ⅱのこれまでの実際の授業を振り返りながら、2018年3月、eポートフォリオ学習及び授業ルーブリック作成の専門家と共に、授業ルーブリックを作成することにした。

まず、最初に取り組んだ科目は、母性看護学援助論Ⅱである。この科目は、看護医療学科3年次前期科目で、同年次後期に行われる臨地実習前の最終段階の科目であり、演習中心の授業である。学生は、本科目の後、学外という臨地実習の場で、今までの学びの成果が問われることになる。そのため、1つは、今まで学んできた知識を統合し、対象の全体像を理解して、看護を実践していくプロセスをしっかりと記録に表すことができること、2つ目は、母性看護学特有の看護技術の試験に合格し、適切な技術を身に着けること、この両方を達成できるように、毎年、効果的な授業方法を求めて試行錯誤していた。

次に取り組んだのは、母性看護学援助論Ⅰである。本科目は、2年次の後期科目で、教室での講義中心である。母性看護学援助論Ⅱが演習中心の科目であるため、母性看護学で学ぶべき知識はすべて本科目で押さえておくことが必要であったため、学ぶべき知識は膨大であり、加えて、この授業期間中、本科目担当教員は、並行して母性看護学実習指導期間中であるため、授業は変則で、短期間でのかなり詰め込み式の傾向が強い。妊娠・分娩・産褥や新生児の生理的変化や看護はイメージしやすいように、授業では、1年次から学んできた基礎・専門基礎科目の内容が母性看護学につながるように説明を行い、その内容をまとめて期日までに提出する、また、母性看護学実習を前に、押さえておきたい病態生理や看護を記載したパンフレットを作成し、その資料の発表会を実施する^{注2)}、そして、母性看護学実習で使用するための実習衣のポケットに入るA 5サイズの学習ノートを作成する、など、2年次より、3年次に行われる臨地実習を意識した取り組みを行った。

このような母性看護学の講義・授業科目の特徴を踏まえて、次の「教育内容」「到達目標」を検討し、母性看護学2科目の授業ルーブリックを作成した(表1・表2)。

注2)：学生が作成したパンフレットは、学生共有フォルダに収め、母性看護学実習で実際の対象に渡したり、対象理解に活用できるようにしている。

1) 教育内容

本学の建学の精神と学士力³⁾、ディプロマ・ポリシー及び母性看護学各科目のシラバスを踏まえ、当該科目の「教育内容」を考えた。ここでは、そのキーワー

ドを取り上げることとする。

まず、母性看護学における、主に知識を学習する「対象とその家族」「支援する人々とのかわり」「生理的変化とその理解」「アセスメントとその看護」の4つの「教育内容」の項目を作成し、母性看護学援助論Ⅰ・Ⅱの2科目共通とした。そして、次に、母性看護学は、正常な妊娠・分娩・産褥・新生児期にある人を対象にしていることが特徴であるため、「教育内容」として、「Wellnessの解決視点^{*注3)}」の項目は外せないものであり、2科目共通の5つ目の項目とした。さらに、母性看護学援助論Ⅰ・Ⅱどちらにおいても、試験の成績のような現実的な他者評価が割り込まない、学生の頑張りや自ら評価でき達成感の得られる項目で、また、看護師として働いていく上でとても大切に、是非身に付けて欲しい項目として、「学び続けていく力」を2科目共通の6つ目の項目として作成した。最後に、母性看護学援助論Ⅰでは、学生の姿勢・態度を評価する項目として、「学習内容の共有とその方法」を7項目として作成し、母性看護学援助論Ⅱでは、臨地実習に向けて、「母性看護学模擬実習(知識・技術・態度)」という臨地実習を再現した演習を盛り込んでいる授業の特徴を活かした項目を7項目目として作成した。そして、それらの妥当性については、専門家の助言を受け、母性看護学講義・演習科目2科目の「教育内容」各7項目を完成した。このようにして作成した、本学の「建学の精神」「学士力」と「ディプロマ・ポリシー」に沿った評価項目としての「教育内容」各7項目は、Excel表の縦軸に割り付けた。

*注3)：「Wellnessの解決の視点」とは、「母性看護学は、健康な過程にある妊産褥婦及び新生児を対象とする科目であるため、問題点を見つける志向ではなく、今の状態を維持あるいはより良くしていくという考え方を、ここでは表している。

2) 到達目標

授業ルーブリックの評価尺度である「到達目標」は、S(遥かに発展的)・A(充分到達)・B(おおむね到達)・C(努力を要する)の4段階とし、A段階はその授業で学生に到達して欲しい目標となるレベルで3点、B段階は学生に最低限到達させたい、つまり、科目の合格レベルで2点とし、S段階は4点、C段階は1点と、本プロジェクト共通で設定した。それを念頭に、母性看護学援助論Ⅰ・Ⅱそれぞれの「授業内容」別に、その「到達目標」を具体的に考えた。授業をする教員ではなく、学生自身が自分で評価できる言葉で表記をしたいため、行動がどこまで、何をどのくらいできるようになるのか、をわかりやすく表現することが課題であった。それには、まず第1として、4つの段階のうち、まず、A段階の到達ラインが授業の目標レベルの内容になるように最初に考えて、表記した。そして、次に、その

段階より、学生がアピールできる付加価値の行動を起こしているレベルの発展的なレベルS段階、反対に、学生のできることがマイナスとなるレベルBまたはC段階を、具体的に表記することにした。特に、学生に最低限到達してもらいたい科目合格レベルはB段階（2点）として位置付けていたため、「未熟な部分はあっても、学生が努力すれば必ず到達できるレベル」をイメージして表記するように留意した。さらに、「教育内容」の項目は1つであっても、「到達目標」は、学生ができるだけ評価しやすいように、行動レベルが複数になるように分けるようにした。そして、その妥当性については、専門家の助言を受け、母性看護学講義・演習科目2科目の「到達目標」を完成した。このようにして出来上がった評価尺度である「到達目標」は、Excel表の横軸として、それぞれ割り付けた。

5. 授業ルーブリックの評価の実際

当該科目の授業ルーブリックは、学生及び教員がPCまたはスマートフォンから利用できるように、本学で活用している授業支援型eラーニングシステムCEAS（以下、CEASと略す）⁵⁾内に、eポートフォリオ学習及び授業ルーブリック作成の専門家が登録及び設定を行った。

そして、学生はルーブリックの評価基準によって、何が求められているか、何をすればいいのかを評価基準で確認して能動的に学びの姿勢を持つことができた。と前述の前田・石川³⁾の報告にあったことから、学生には、授業開始当初から授業ルーブリックを紙資料としても学生全員に配布し、到達目標や修得すべき授業内容を確認するよう指示した。また、評価時は、「今できていなくても、ありのままを評価して構わない。」と学生に伝えた。

さらに、母性看護学援助論Ⅰ・Ⅱの2科目共において、中間評価と最終評価の各2回、該当期日が来た時点でアナウンスを行い、CEAS内の該当授業ルーブリックを開いて、評価項目である各「教育内容」について、4段階の評価尺度である「到達目標」の中から、自己評価の結果に合う到達レベルを選択し、登録するよう指示した。尚、授業ルーブリックの実際の評価方法の手順については、CEAS内に資料として割付しておき、いつでも学生が閲覧できるようにしておいた。

IV結果

結果は、表3・4及び図1-6の通りである。母性看護学援助論Ⅰ・Ⅱ共に、すべての「教育内容」について、中間評価より最終評価の平均値は、有意に点数が高くなった（表3・4、図1-6）。

表3 授業ルーブリック評価結果①
(母性看護学援助論Ⅰ)

教育内容 (項目)	中間評価		最終評価		有意水準 **P < 0.01
	平均点数	標準偏差	平均点数	標準偏差	
対象とその家族	2.1	0.6	2.6	0.7	**
支援する人々とのかかわり	1.9	0.7	2.6	0.6	**
生理的変化とその理解	2.1	0.6	2.7	0.6	**
アセスメントとその看護	2.0	0.7	2.6	0.8	**
学習内容の共有とその方法	1.8	0.6	2.6	0.7	**
学び続けていく力	2.2	0.6	2.8	0.7	**
Wellnessの解決視点	1.6	0.6	2.2	0.8	**
合計	13.7	3.0	18.0	3.6	**
平均	2.0	0.4	2.6	0.5	**

表4 授業ルーブリック評価結果①
(母性看護学援助論Ⅱ)

教育内容 (項目)	中間評価		最終評価		有意水準 **P < 0.01
	平均点数	標準偏差	平均点数	標準偏差	
対象とその家族	2.3	0.5	2.8	0.5	**
支援する人々とのかかわり	1.9	0.6	2.7	0.5	**
生理的変化とその理解	2.2	0.6	2.9	0.5	**
アセスメントとその看護	1.9	0.7	2.8	0.5	**
母性看護学模擬実習 (知識・技術・態度)	2.1	0.6	2.6	0.6	**
学び続けていく力	2.7	0.6	3.2	0.6	**
Wellnessの解決視点	1.9	0.5	2.7	0.6	**
合計	15.0	2.5	19.7	2.6	**
平均	2.1	0.4	2.8	0.4	**

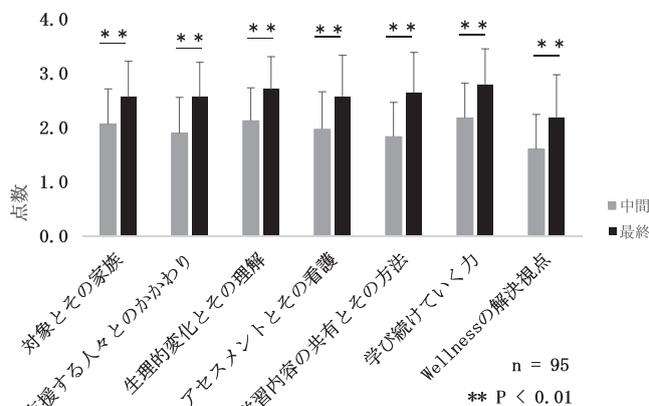


図1 授業ルーブリック評価結果②
(母性看護学援助論Ⅰ 中間・最終)

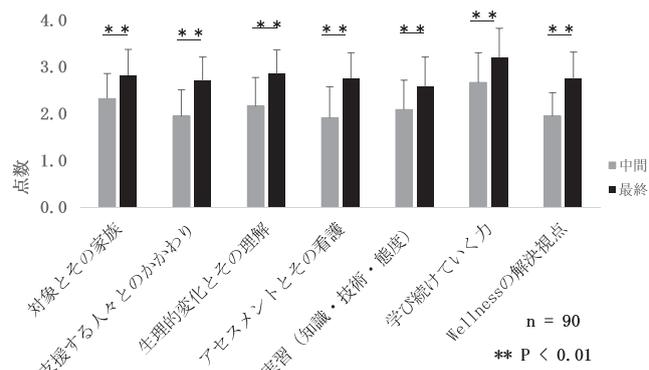


図2 授業ルーブリック評価結果②
(母性看護学援助論Ⅱ 中間・最終)

1. 母性看護学援助論Ⅰ (表3、図1・3・5)

本科目の「教育内容」項目の平均点数は、中間評価では2.0であったが、最終評価では2.6であった。7つのすべての項目の最終評価の平均は、中間評価よりも有意に高かった (P < 0.01)。「教育内容」の項目別で見ると、「学び続けていく力」の中間評価の点数は2.2

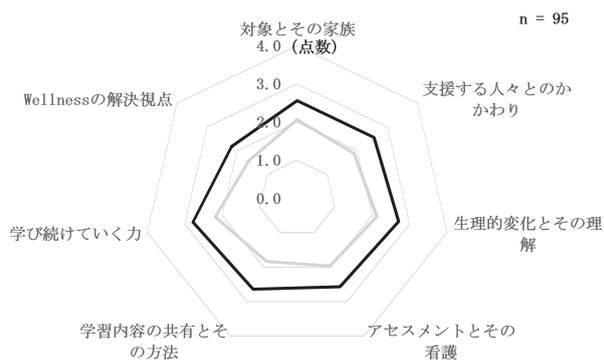


図3 授業ルーブリック評価結果③
(母性看護学援助論Ⅰ)

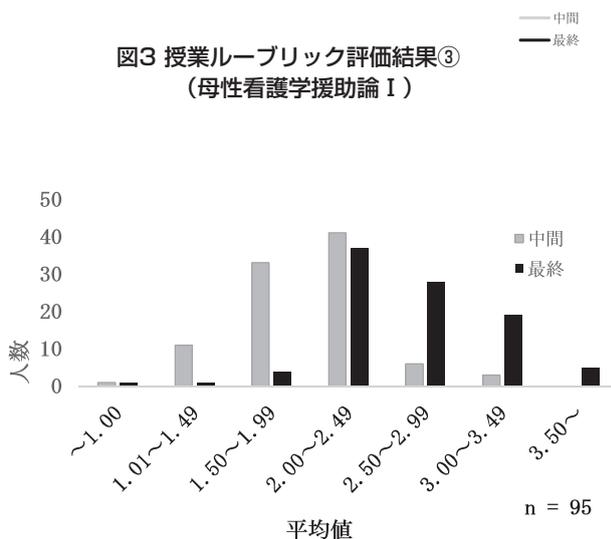


図5 授業ルーブリック評価結果④
(母性看護学援助論Ⅰ)

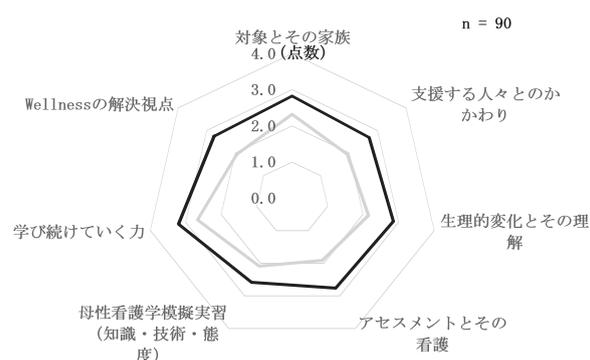


図4 授業ルーブリック評価結果③
(母性看護学援助論Ⅱ)

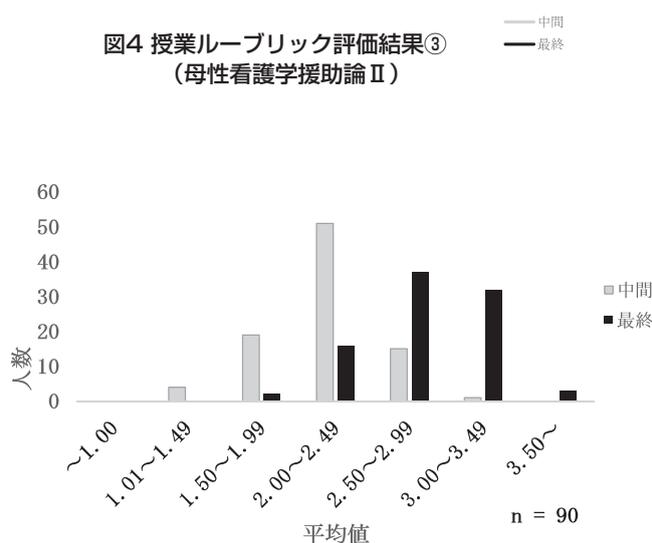


図6 授業ルーブリック評価結果④
(母性看護学援助論Ⅱ)

と最も高かったが、最終評価においても2.8と最も高かった。「支援する人々とのかかわり」「学習内容の共有とその方法」の中間評価の点数は1.8～1.9と、他の項目の点数よりも低かったが、最終評価では2.6と、他の項目と同程度に高かった。「Wellnessの解決視点」の中間評価の点数は1.6と最も低く、最終評価においても2.2と最も低かった。

学生個人の結果を見ると、中間評価の最低点数は1.0で、最高点数は3.3であった。また、最終評価の最低点数は1.0で、最高点数は4.0であった。

2. 母性看護学援助論Ⅱ (表4、図2・4・6)

本科目の「教育内容」項目の平均点数は、中間評価では2.1であったが、最終評価では2.8であった。7つのすべての項目において、最終評価の平均は、中間評価よりも有意に高かった ($P < 0.01$)。「教育内容」の項目別で見ると、「学び続けていく力」の中間評価の点数は2.7と最も高かったが、最終評価においても3.2と最も高かった。「支援する人々とのかかわり」「アセスメントとその看護」「Wellnessの解決視点」の中間評価の点数は、いずれも1.9と、他の項目よりも低かつ

たが、最終評価では2.7～2.8と、他の項目と同程度に高かった。

学生個人の結果を見てみると、中間評価の最低点数は1.3で、最高点数は3.0であった。また、最終評価の最低点数は1.7で、最高点数は3.7であった。

V 考察

1. 母性看護学援助論Ⅰ

本科目における「教育内容」の項目の中でも、知識や対象への姿勢・態度などの評価項目である「支援する人々とのかかわり」「学習内容の共有とその方法」の中間評価の点数は1.8～1.9と他の項目より低く、また、科目の合格基準である2未満であった。山口⁸⁾は、学生の母性看護学に関する苦手意識は、講義を受ける中で形成されることが多く、「覚えることが多い」「覚えにくい」「実際のイメージが付きにくい」という認知に関する要因が影響すると報告している。この報告にあるように、少子化・核家族化によって、母性看護学の対象である母子に身近に触れ合う機会がほとんどない現代社会においては、妊娠・分娩・産褥や新生児の

生理的变化や看護はイメージしにくく、それによって、母性看護学に対して早い段階から苦手意識を持つ学生が多い。しかし、今回の最終評価では、「支援する人とのかかわり」「学習内容の共有とその方法」が知識の評価項目である「生理的变化とその理解」と共に、2.6～2.7と高い点数となったことから、前述の山口⁸⁾の報告にあるように、2年次から、臨地実習を視野に入れて、実際の対象をイメージできるようなわかりやすい授業の工夫をした様々な取り組みは、学生の知識の定着に効果的であったと考える。

また、「Wellnessの解決視点」は、中間評価・最終評価共に、「教育内容」の項目の中で最も点数が低かった。最終評価は2.2で、中間評価の1.6よりも0.6高くなり、合格基準と設定していた点数である2を超えたが、他の項目の点数は2.6～2.8であるのに比較してかなり低かった。この項目は、母性看護学特有の概念的な看護の考え方を学ぶものであったが、3年次の母性看護学援助論Ⅱと同じ評価項目であるにもかかわらず、今回、2年次に到達可能な基準が明確に設定できていなかった。このことから、2年次の学生が達成できる適切な評価ツールとして活用できずに、2年次の学生にとっては目標が高いものとなり、最終評価においても点数が低い結果となってしまったと考える。戸田⁹⁾は、学生は、理解が難しかったことが「分かった」、練習したことが「できた」、努力を重ねることにより「できた」という体験を通じて自己効力感を高めており、「できた」という思いで喜びを感じ、喜びが「もっとよい状況になるにはどうしたらよいのだろうか」といった次の課題に対する学習意欲となる、と述べている。2年次科目と3年次科目の評価項目が同じでも、授業ルーブリックを2年次科目の母性看護学援助論Ⅰという一科目だけの評価にとどまらず、3年次科目の母性看護学援助論Ⅱに向けて学生の成長が見られるような評価ツールとして導入することも可能である。しかし、前述の戸田⁹⁾の報告にあるように、学生が達成可能な小さな目標から大きな目標へとステップアップできるように、授業ルーブリックの目標は年次に応じた内容にすることで、全体の平均値も高くなり、学生の達成感が得られるものになるのではないかと考える。同じ評価項目を使用するのであれば、2年次の母性看護学援助論Ⅰで達成できるわかりやすい評価尺度に修正することが必要であるため、今後、授業ルーブリックの改善点として検討する。

2. 母性看護学援助論Ⅱ

本科目における「教育内容」の中でも、知識の評価項目である「支援する人とのかかわり」「アセスメントとその看護」と、母性看護学特有の考え方を学ぶ項

目である「Wellnessの解決視点」については、中間評価の点数は1.9で、合格基準と設定していた点数2よりも低かった。しかし、最終評価では2.7～2.8と他の項目と同程度の高くなり、その伸び幅は非常に大きかった。この科目を開講している3年次前期の学生は、他の看護学領域科目からも課題が重なっていたのと同時に、目の前に迫っている臨地実習で、看護師としての知識と技術と態度・姿勢を評価されるという切迫感に、負担と不安を感じていた。しかし、1年次からの学習の積み重ねによって、学習習慣がしっかりと身につけてきた時期でもあるため、基礎科目・専門基礎科目の知識を復習しつつ、こつこつと学んでいた学生の努力の結果が、この最終評価の高い点数に結びついたと考える。これは、「学び続けていく力」の項目が、中間評価では2.7、最終評価では3.2と、共に最高点数で維持できている結果からも読み取れる。

また、3年次後期の臨地実習前の最終段階に位置付けられている本科目に特徴的な項目である「母性看護学模擬実習（知識・技術・態度）」は、中間評価は2.1であったが、最終評価では2.6と、他の項目と同じ程度に高かった。二村ら¹⁰⁾は、(母性看護学の)状況設定を用いた演習を組み立てることで対象のイメージ化を促し、判断力の向上に繋がるように工夫する必要がある、と述べている。この報告にあるように、実際の臨地の現場を想定し、母性看護学の対象や臨地施設の指導者・教員とのTPOに応じた態度・言葉遣い、コミュニケーション(挨拶、報告連絡相談、身振り・姿勢、声の大きさ、距離感、表情など)の模擬体験をするなど、本科目での様々な取り組みによって、自己の対応力が向上したという学生自身の実感が得られた結果、最終評価が高くなったのではないかと考える。加えて、末永・原田¹¹⁾は、母性看護学実習前に新生児モデルによる育児疑似体験を行うことで、児に対する肯定的な感情が高まりやすく、育児疑似体験は母性看護学実習の準備学習として効果的である、と報告している。少子化や実習施設の減少によって、母性の対象や看護のイメージ化がより困難となっている中、本科目の「教育内容」の項目すべて、最終評価の平均点数が2.8と非常に高い学生の自己評価につながった。これは、演習中、学生から「赤ちゃん可愛い」「母性看護が楽しい」という言葉が聞かれたことから、本授業において、臨地実習を再現したさまざまな疑似体験授業を取り入れたことによって、学生が実習に向けての自信を持てた結果ではないかと考える。

3. 全体

今回のすべての「教育内容」の項目において、評価の平均点数に大きな偏りがなかったことは、初回の授

業ルーブリックとしては、今後継続して活用できる評価ツールとなったと考える。母性看護学の講義・演習科目2科目の中間評価・最終評価共に、最も点数の高かった項目は「学び続けていく力」であった。「学び続けていく力」は、学生の頑張りを自ら評価できる項目であるため、どうしても学生に評価してもらいたい項目であった。授業を通してこつこつ学習に取り組んできた学生自身の努力に対する自己評価が大きく反映された項目であると考え。今回のプロジェクトへの参加協力が全学生の94～99%と高率であった結果からも、学生にとって、自己の頑張りを評価でき、満足感が得られる項目であったのではないかと考える。

鈴木¹²⁾は、教育の質を点検する方略としてインストラクショナルデザインを用いた「いらつきのなさ」「うそのなさ」「分かりやすさ」「学びやすさ」「学びたさ」の5つのレイヤーモデルを提唱している。これまで母性看護学の講義・演習科目でおこなってきた様々な取り組みの効果は、今回「学び続けていく力」の項目の点数が最も高かった結果から、この報告における学生の「学びたさ」につながっていたと考える。そして、知識の学習において、「分かりやすさ」「学びやすさ」を授業において工夫したことは、それらが相乗効果として働き、学習を加速する方向につながり、今回の母性看護学講義・演習2科目共に最終評価が高得点となった結果につながったと考える。今回作成した母性看護学の授業ルーブリックにおいて、学生に最低限到達させたい合格基準は到達目標B(点数2)であったため、最終評価の平均点数が、母性看護学援助論Ⅱでは2.8、母性看護学援助論Ⅰでは2.6という結果は、授業の到達目標を達成できたと言える。

学生個々の結果を見てみると、中間評価の平均は、最高点数と最低点数の学生では、最大2.3ポイント差で、最終評価の平均では、最高点数と最低点数の学生で最大3.0ポイント差と、個人差があった。また、中間評価・最終評価共に、点数が高い傾向にある学生や低い傾向にある学生がいた。そして、中間評価よりも最終評価の点数が低かった学生もいた。この結果は、自己を過大あるいは過小に評価したか、また、事実に基づいていたか、あるいは、いなかったか、さらに、きちんと評価する意思があったか、あるいは、なかったかや、自己評価に影響を与えていると思われる学生個々の事情についての詳細もわかっていない。まずは、授業ルーブリックの記述後の曖昧な表現を見直し、定量的な表現にするなどできるだけ評価者によってばらつきのないものに修正できないか検討することが必要である。また、自己評価に関して、Bandura(1980)は、人は自分自身で行動基準を設定し、その基準に照らし

て自分自身の行動を評価すること、以前の自分の行動が今現在の遂行行動を判断する準基準として設定され、それが自己評価に影響する¹³⁾、と指摘している。このことから、自己評価の低い学生は、他の領域の科目でも共通して自己評価が低い傾向があるかもしれない。よって、授業ルーブリックの活用においては、他領域の結果と共有していくこと、また、学生と一緒にできた体験を評価する教員のかかわりが今後は必要である。

また、母性看護学実習でルーブリック評価を活用した前田・石川³⁾の報告では、4～5名と少人数の学生に教員が1名担当しており、実習施設の実習指導者の協力体制と実習時間内のリフレクションの時間が設けられていた。ルーブリックを活用することで、学生・教員相互で到達状況を正しく把握でき効果的なフィードバックができたと述べている。母性看護学実習は、看護の対象者が少ないこともあり、本学でも1施設で受け入れ可能な学生3～6名に対し、1名の教員が担当している。しかし、本学の母性看護学の講義・演習科目である2年次の母性看護学援助論Ⅱでは、90～100名の学生、3年次の母性看護学援助論Ⅱでは、45～50名の学生を1回の授業において対象としており、母性看護学援助論Ⅱの演習では、非常勤教員の協力体制を得られたが、授業内でのルーブリック活用を実現することはできておらず、今回は母性看護学講義・演習2科目共に、学生の自己評価ツールとして導入したのみとなった。

猪俣¹⁴⁾は、ルーブリックが、課題の最終的な評価だけではなく、学生たちの学びをより深くするために有効であること、まずは作って、実際に評価し、修正することで、よりよいルーブリックが作成できるということ、そして、多面的に評価するようなものについて、さまざまな場面でその利用の可能性があるとして述べている。今後の課題としては、今回のような、授業ルーブリックにおける学生の自己評価の数的分析だけでなく、母性看護学援助論Ⅰにおいては、授業ルーブリックの中間評価・最終評価までに、学生の授業の出席状況や課題の提出状況や内容など、取り組む姿勢・態度などの情報の分析を行って、少なくとも必要な学生には早期に対応できるようにすること、そして、母性看護学援助論Ⅱでは、母性看護学援助論Ⅰでの対応に加えて、今まで実際に口頭や文章で行ってきた学生との振り返りの場面において、学生と教員と一緒に授業ルーブリックを活用できる授業案を考えていくことが必要であると考え。学生の自己評価をそのつど質的にも分析していくことができるような授業設計や分析した結果を具体的に授業改善へと実現する方法を

検討したい。そして、これまでも授業内・外で多くの時間を費やして重ねた学生や教員との貴重なやり取りを含め、eポートフォリオとして活用していくことで本取り組みを発展させたいと考える。

VI 結語

今回、NEPSプロジェクトの母性看護学における授業ルーブリック評価導入を試みた。そして、母性看護学の講義・演習2科目において、授業ルーブリック評価導入によって、学生は自己評価を主体的に実践するという結果が得られた。また、授業ルーブリックを活用することによって、中間評価と最終評価の2回で得られた学生の自己評価後の数値的なデータから得られた結果の分析による知見のみにとどまっていたが、気になる学生を知ることができ、今後の学生への効果的な学習支援のあり方を検討する上で貴重な資料となった。さらに、現在行っている母性看護学講義・演習2科目の授業の到達目標は達成できたと確認することができた。

大学における看護教育課程は、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の第5次改正により2022年から変革がもたらされる。少子化によって、大学入学者数が増えつつ減少している社会背景もあり、山田・池西¹⁵⁾は、養成所も大学も、必要とされる学校になるために提示された教育内容を画一的に実施するのではなく、何が求められているのか、どのような看護師を育てるのか、学校や教員が自分たちで考えなければならない、と述べている。今回の結果を共有し、本学看護医療学科教育活動の将来像への視点を踏まえ、その指標となるものを造ることに、真摯に取り組んでいきたい。そして、これからも、学生の学びを支援し、寄り添っていきたい。

謝辞

本プロジェクトに、参加・協力して下さった看護医療学科の学生の皆様に深く感謝いたします。また、プロジェクトのメンバーである看護医療学科の基礎看護学及び老年看護学の教員の方々には、この報告に当たって、多大な知見をいただきましたことに感謝いたします。

尚、この研究は畿央大学平成28年度教育改革事業およびJSPS科研費26730177の助成を受けたものです。

文献

1. 厚生省の指標 増刊 国民衛生の動向 2018/2019, 厚生労働統計協会, 6(9), 2018.
2. 文部科学省, 中央教育審議会(2008): 学士課程教育

の構築に向けて(審議のまとめ),

2008.http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212958_001.pdf

3. 前田直美, 石川智子: プロジェクト学習とポートフォリオ評価を基盤としたルーブリックの導入効果, 神奈川県歯科大学短期大学部紀要, 3, 7-14, 2016.
4. 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成するために～」答申(平成24年3月)用語集http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf
5. 宮崎誠, 山崎尚美, 林有学, 他: 看護基礎教育におけるeポートフォリオ学習の実践報告(第一報)―看護教育におけるeポートフォリオ学習の導入―, 畿央大学紀要, 15(2), 67-73, 2018.
6. 須藤聖子, 林有学, 小林智子, 他: 看護基礎教育におけるeポートフォリオ学習の実践報告(第二報)―基礎看護学におけるeポートフォリオ学習の導入―, 畿央大学紀要, 15(2), 75-81, 2018.
7. 山崎尚美, 南部登志江, 他: 看護基礎教育におけるeポートフォリオ学習の実践報告(第三報)―老年看護学におけるeポートフォリオ学習の導入―, 畿央大学紀要, 15(2), 83-88, 2018.
8. 山口静江: 母性看護学に対する苦手意識の形成要因と軽減要因, 日本看護学会論文集, 43, 84-87, 2013.
9. 戸田美幸: 母性看護学実習において看護学生の自己効力感に影響を与える要因(文献レビュー), 聖泉看護学研究7, 41-46, 2018.
10. 二村文子・片岡優華・志村千鶴子: 看護基礎教育における産褥期の母子への看護実践能力の習得を目指した教育実践, 創価大学看護学部紀要, 2, 2016.
11. 末永芳子・原田なをみ: 新生児モデルを用いた育児疑似体験の母性看護実習準備学習への効果, 保健科学研究誌, 7, 7-15, 2010.
12. 鈴木克明: インストラクショナルデザインの道具箱101, 北大路書房, 2016.
13. B.J.ジンマーマン(本明寛, 野口京子訳): 激動社会の中の自己効力(アルバート・バンデューラ編)第7章 自己効力と教育的発達, 金子書房, 179-204, 1997.
14. 猪股久美: 看護教育における成果を学生と教員よりよく評価するために, 看護教育, 58(11), 934-

939, 2017.

15. 山田雅子・池西静江: 指定規則の改正をチャンスに、自由に、地域に開かれた学校へ, 看護教育特集 指定規則改正前の今こそ! 時代を見据えたカリキュラムを考える, 60(2), 90-98, 2019.

